

広島大学 高等教育研究開発センター 大学論集
第48集 (2015年度) 2016年3月発行：193-209

留学生による地域協働の実習のエンパワーメント評価 —歴史資産を紹介する「国際観光ガイド」インターンシップ—

恒松直美

留学生による地域協働の実習のエンパワーメント評価

—歴史資産を紹介する「国際観光ガイド」インターンシップ—

恒松直美*

1. はじめに

本稿では、広島大学短期交換留学プログラム（Hiroshima University Study Abroad Program, HUSA）¹⁾ 留学生向けの「グローバル化支援インターンシップ」授業における「国際観光ガイド・インターンシップ」実習を行った留学生インターンのエンパワーメント自己評価について考察する。日本語と日本文化に強い興味を持ち日本の大学に留学してきた交換留学生が、日本の地域社会と協働し、地方に残る歴史的資産を紹介する「国際観光ガイド」実習を通じ、どのように自身がエンパワーメントしたと捉えているのかについて考察する。本実習では、受講した留学生（HUSA インターン）が、外国人としての知見と日本語能力及び日本社会に関する学術知を実践知として地域活性化に生かす社会体験となる実習を目指した。

「国際観光ガイド」実習は、アジア・オセアニア・ヨーロッパの5か国出身の交換留学生8人が、2014年9月末の来日から4か月半後の2015年2月に広島県呉市倉橋町にある「長門の造船歴史館」において行った。ガイド実習は、日本の外交史や造船の歴史などの専門的知識の習得、行政との会議の参加や企画マネジメントなど、社会体験のない交換留学生にとり難易度の高い挑戦であり、実現のためには留学生の強い動機づけとエンパワーメントが鍵となった。本研究は、アジア・ヨーロッパ・オセアニア出身の交換留学生が、市行政関係者や地方自治体の人々と協働しつつ留学生間の多文化性と日本の地域文化に同時に向き合う実習を通じ、自身のエンパワーメントをどう捉えたのかについて考察するものであり、外国人と地域社会との関係性構築の在り方や多文化共生社会推進の方策を探る一つの指針ともなると考える。

2. 留学生の異文化性を活かす実習とエンパワーメントの意義

2. 1 留学生インターンの動機づけとエンパワーメントに関する理論的背景

インターンシップにおけるエンパワーメント評価に焦点をあてた研究や日本の地域社会と連携した留学生のインターンシップにおけるエンパワーメントの研究は未発展である。まず、実習のエンパワーメント評価に関連する先行研究と理論的背景について論じ、留学生インターンシップについて「エンパワーメント」という尺度で評価を行うに至った経緯とその意義を明確にする。留学生が自主性を持ちつつ社会体験を持てる実習の在り方を模索する過程で、留学生が動機づけによりエン

*広島大学国際センター准教授

パワーメントし自律性を持ち実習に取り組む場の構築が学生の積極的態を引き出し意義ある社会体験をもたらすとの見解に至った。その見解に至るうえで参考としたエンパワーメントの概念と密接に関わる「動機づけ」に関する考察、留学生が日本の地域社会と協働するインターンシップにおけるエンパワーメントの意義、エンパワーメント評価の考察に関する先行研究について述べる。2012年度に留学生の強い動機づけとエンパワーメントに着目し派遣型インターンシップから学生が主体となり企画を提案し実行するプロジェクト型に転換した際、協働する企業・行政・地域に対して学生が対等のパワー関係に立つことによるエンパワーメントに着目した。留学生がエンパワーメントする実習の在り方として、1) 強い動機づけ、2) 地域と対等の立場に立てる社会体験、の2点に着目した。

まず、動機づけとエンパワーメントの関連性について論じる。宮脇(2008, 60, 80-83)は、Deci & Flaste(1995)の論説に言及し、有能感と自律性と結びつくことで内発的動機づけが起こってエンパワーメントし、人の自己が発達して創造性が高まり、積極的に自発性と自律性を持ち行動すること、人は効果的かつ自律的でありつつも他者と結びつく関係性の欲求を持つため重要な他者からの自律性の支援が重要であると述べている。この議論は留学生の動機づけとエンパワーメントや地域の人々との関係性構築への要望とその支援の重要性に置き換えて考えることができる。エンパワーメント指標に関する議論からも動機づけの重要性が指摘されている。Feldman & Weitz(1990, 270-271)による夏季インターンシップでのポジティブな体験の要因分析では、学生の態度の評価指標として、仕事の満足度・仕事への動機づけ・仕事との関わり・組織へのコミットメントを取り上げ、動機づけが仕事での努力、生産性、仕事の質、人間としての成長に関わる満足度に深く関連すると述べている。Alpert, Heaney, Kuhn(2009, 37-38)によるインターンシップの目標・組織・評価に関する学生・企業・大学の視点からの考察では、インターンシップの困難としてプロジェクトの一員として意義のある仕事に従事していると学生が認識しにくい現状を述べ、学生が意義のある仕事に従事する重要性(Ryan & Krapels, 1997)と動機づけが仕事の質を高める(Trovey, 2001)ことを論じている。さらに、価値ある経験を学生が持つためには、学生は挑戦的かつケアされる環境で正統的プロジェクトに従事する必要があると指摘する。海外でのインターンシップでのスキル活用不足やスキル発展の機会の不足に対する学生の失望についての指摘(Feldman & Bolino, 2000)もある。

次に、留学生インターンが地域と対等の立場に立てる社会体験を持つことによるエンパワーメントについて述べる。Kasim & Al-Gahuri(2015)は、研究者は研究するコミュニティに対し相互依存の関係と平等なパワー関係を構築しつつ良好な関係を築き信頼を得ることが必要となると指摘する(Emmel, Hughes, Greenhalgh, Sales, 2007; Rist, 1981)。本実習でも大学と地域関係者との対等な関係の構築が意義ある実習には不可欠であるとの見解に基づき、留学生の日本理解と異文化性を活かし、学生が自己決定権を持ち地域の人々と対等のパワー関係に立てるよう「国際観光ガイド」実習を試みた。自身の外国人としての知見の地域への貢献により地域に価値を生み出すとともに留学生も自己効力感を持つことにより対等のパワー関係に立てると想定した。留学生が自主的に企画を考案しエンパワーメントする重要性については、ソーシャルワーク理論におけるクライアント自身

の持つ力や自己決定権への着目の視点も参考とした。久保(2000)は、ソーシャルワーク理論におけるエンパワーメント実践の基盤にある重要な価値としての人間のニーズの充足、社会正義の促進、資源の平等な分配、人種差別などの排除、自己決定、自己実現(Cox, 1994)に言及し人々の強さとコンピテンスに焦点を当てる重要性を説く。エンパワーメント評価の議論においても自己決定能力に焦点があてられている。フェタマン(Fetterman, 1996, 2001)が提唱する「エンパワーメント評価」理論では、エンパワーメント評価は、自らが関わる事業を改善し自発的に自らの状況を改革しようとする人々(=グループ)に対し、「自己評価(self-evaluation)」と「反省(reflection)」を通して自己決定能力(self-determination)を身につけるプロセスを提供することであると説く(源, 2003)。中河・鎌田・飯野(2013, 89)は、フェタマン(Fetterman, D.)やワンダーズマン(Wandersman, A.)らが提唱したエンパワーメント評価の定義を「当事者が自分のプログラムを計画し、実行し、評価する能力を増大させることで、プログラムが成果を生み出す可能性を高めることを狙った評価方法」としている。これらの先行研究から自己決定権・自己効力感・自律性・共同体や社会と関わる意味づけなどがエンパワーメントと深く関わる事が分かる。

次に、留学生が地域との対等なパワー関係に立つことによるエンパワーメントに関連した議論について述べる。宮崎・河北(2012, 51-52)は、日本で生活する外国籍市民のエンパワーメントのための地域社会の関わりに関する研究において、カミンズ(2011)による「協働的に力を創り出す」エンパワーメントの理論を引き出す。教員が言語マイノリティの子どもの言語と文化を資源として活用することで、子供は自身の多言語・多文化アイデンティティを表現し自尊心を持ってるという論説である。この論説は、本実習において日本の地域社会でマイノリティの存在である留学生が自身のアイデンティティを尊重しつつその知見を生かし地域と協働的關係を構築しエンパワーすることとも重なる。さらに、Vandever & Menefee(2006)は、国際的体験学習の価値として、外国語でコミュニケーションをとり企画を進める実体験によるエンパワーメント、快適ゾーン外での予想外の状況との遭遇による深い学び、慣れた状況外でのインタラクション、地域と国際との関係性の課題着目等を挙げているが、本実習も留学生が快適ゾーン外の不慣れな場で異文化性と日本理解を活用する体験である。これらの先行研究を参照しつつ、定義の多様性を持つ「エンパワーメント」という用語について、本稿では「自身がパワーを持っていると感じ、自身の持つ知識・力・資源・スキルを自ら使い、自ら決定して目的を成し遂げ、人に影響を与える力を持つこと」と定義し考察する。本研究の特殊性は留学生間の多元化された異文化性と日本の地域社会の価値観とが交錯する場で留学生が異文化性と日本文化理解を生かす社会体験を持つことによるエンパワーメントの自己評価を分析することにある。

2.2 地域の多文化共生推進と国際観光振興に関わる留学生の社会体験

実習で協働する留学生と地域社会が対等のパワー関係に立ち双方に意義ある体験学習の場を構築する観点から、留学生との関わりが地域社会にもたらす効果について国際観光振興と地域の多文化共生の2点から述べる。1963年に制定された観光基本法を全面改訂し、2007年に施行された観光立国推進基本法(国土交通省観光庁)²⁾では、「国際競争力の高い魅力ある観光地の形成」(第12-14条)、

「観光産業の国際競争力の強化及び観光の振興に寄与する人材の育成」(第15条・16条)、「国際観光の振興」(第17条・18条)を掲げ、国際競争力の高い国際観光の推進が提唱されている。地域創生の施策として、国際観光の振興に関し留学生は意義ある知見を提供し新しい価値観の形成をもたらすとともに、地域と協働する社会体験は留学生が実社会を体験的に学び、日本と世界をつなぐ方策や異文化理解の課題等について考察する教育の場をもたらす。これは総務省が提唱する地域の多文化共生社会の推進にも関わる。平成18年3月、総務省は「多文化共生推進プラン」を発表し、地域で多文化共生を推進する人材の育成と活用を提唱してきた。「地域における多文化共生推進プランについて」(総務省)では、地域における情報の多言語化、外国人住民と自治会等が連絡を取れる仕組みづくりや国際理解教育の推進、留学生が多文化共生の地域まちづくりに参画する支援、地域住民等に対する多文化共生の啓発などが提唱されている。

3. 地域との協働による国際観光ガイド・インターンシップ実施の背景と実習内容

「国際観光ガイド」の実習内容の概要について述べる。呉市倉橋町「長門の造船歴史館」における「国際観光ガイドインターンシップ」実施には、担当教員と行政及び地域関係者との連携が不可欠であった。2014年6月に呉市役所に企画を提示し、関係部署及び地域関係者との企画会議を開催し準備を進めた。長門の造船歴史館のある呉市倉橋町の人口は2015年3月末日時点で、5,901人で、高齢化率(65歳以上)は、46.4%である中³⁾、本企画を実行する過程で留学生の若い力と新しい知見の活用への期待の声地域関係者からあった。2014年10月末には「倉橋長門の造船歴史館の国際的広報の施策」公開国際セミナーを開催して留学生の企画提案を行い、2泊3日の実習のための呉市による宿泊施設の提供も決定した。実習を行った8名の留学生の詳細を表1に示した。3日間の実習内容は以下である。

1) 呉市倉橋町「長門の造船歴史館」における国際観光ガイド(2月15・16日)

2月15日(日)は、約1時間の日本語と英語のガイドを午前と午後各1回ずつ行い、各回2人ずつ担当した。16日(月)は、呉市産業部観光振興課が市民より参加者を募集して長門の造船歴史館を訪問する「国際観光ガイドバスツアー」(14名参加)を企画しガイドを聴く人を募った。両日の造船歴史館の訪問者数は合計127名であった。

2) 呉市「倉橋フェスティバル」のステージ出演(2月15日)

本年度で第17回目となる「倉橋フェスティバル」のステージに2回出演し、国際観光ガイドのスケジュール紹介とインターン考案の倉橋町の土産品の提案の紹介と投票依頼及び投票発表を行った。商業祭としての性質を持つフェスティバルでは倉橋観光ボランティアガイドの会、女性会や自治会などの地域団体がテントを設営して地域特産物や調理品の販売を行った。地域関係者の報告では2015年度の倉橋フェスティバル参加者数は約1万2千人、ステージ前の観客席には約500名がいたとされる。

3) 「倉橋フェスティバル」会場における倉橋の土産品とマスコットの投票と集計

ガイドの担当部分の合間に、インターンがフェスティバル会場において交代で倉橋町のお土産品

とマスコットの投票の依頼をして回った。集計結果は、マスコット品3点は、遣唐使船 36票、犬 14票、猫 9票で、お土産品3点は、スマートフォンケース 34票、布鞆 12票、Tシャツ10票であった。

4. 調査概要

4. 1 調査対象者とその背景

本研究の分析対象を2014-2015年度「グローバル化支援インターンシップ」受講者で本「国際観光ガイド」実習をした広島大学短期交換留学生8名のうち7名とする（表1参照）⁴⁾。5か国出身の8人のインターンのうち、ガイドは、中国・韓国・ドイツ出身の6人のインターンが日本語で、オーストラリアとポーランド出身の留学生2人は英語で行った。

表1 交換留学生インターン8人の特徴（国・専攻等）

国	アジア圏：韓国・中国 西欧圏：オーストラリア・ポーランド・ドイツ（計5か国）
性別	女子学生4人・男子学生4人
学部・大学院	学部生6人・大学院生2人
専攻	文化人類学・情報テクノロジー・日本語・日本研究・政治学・国際ビジネス
日本語能力	上級レベル6人・中級レベル2人
英語能力	母国語者1人・上級レベル2人・中級レベル5人

出典：筆者作成

4. 2 調査方法

実習終了後の2015年2月末に、エンパワーメント評価シートを配布し、各評価項目を1~4の4段階（1.エンパワーメントしなかった、2.あまりエンパワーメントしなかった、3.少しエンパワーメントした、4.とてもエンパワーメントした）で評価をお願いした。さらに、2月末~3月に1~2時間の1対1の半構造化インタビューを教員の研究室で行った。各学生のインタビュー開始時に「エンパワーメント」の定義を確認するとともに評価点を再確認しつつ進めた。インタビューは、アジア圏は日本語で、西欧圏は英語で行った。インタビュー開始時に各項目について話したいことのみ自由に述べるよう伝えた。秘密を厳守し、本人であることが特定可能な形で論文等に記載しないなど、プライバシーには十分配慮する点を明確に伝えた。インタビューはその場でコンピューターに記録した。

4. 3 調査内容

前述したインターンシップにおける動機づけとエンパワーメントの関係やエンパワーメント評価に関する先行研究を参考とし、本研究では、留学生が日本の地域社会と協働し、外国人の知見を生かし対等のパワー関係に立ち実習を行うという文脈に基づき、表2の「実習によるエンパワーメント評価指標」を設定した。1) 日本語と日本文化理解（「1. 日本語」「2. 日本文化」）、2) 汎用的能力（「3. アクセス」「4. リーダーシップ」「5. 決定権」「11. 自己効力感」）、3) 地域社会との連携における留学生の力（「6. 留学生インターンの連携」「7. 留学生の能力に関する認識」「8. 文化的な従属的地位の転換」「9. 日本の地域社会・市役所・学校・企業等への貢献」「10. 他の留学生へのモデル提示」）

の3側面から11のエンパワメントの要因を評価指標として設定した。「評価カテゴリー」と下部概念として「評価項目(概要)」を設定した(表2)。インタビュー内容の要点をアジア圏と西欧圏について表2に提示した。各「評価カテゴリー」ごとの各インターンの4段階評価の点数に基づく考察とインタビュー内容に基づく各評価項目ごとの詳細分析を行った。

5. 分析と結果

5. 1 分析方法

全評価項目について、各インターンによる各項目の4段階評価の数値を図で示した。匿名性を保つため学生の出身地域(アジア圏・西欧圏)と日本語能力及び英語能力のみ提示し、アジア1~4、西欧1~3と番号により各学生の評価点を提示した。数値化により、日本語能力や文化的背景の相違による傾向の有無や全体像を総括的に把握することを意図した。日本語上級のアジア圏の留学生と日本語中級で英語で話す西欧圏の留学生は、実習現場で異なる態度を示す傾向にあった。日本語使用の場合、内と外や上下を意識した礼儀を示す傾向にあった。インタビュー内容を最も適切と思われる項目に整理し直し表に記入した。

5. 2 分析結果

5.2.1 インターンによるエンパワメント評価点の分析

各「評価カテゴリー」ごとの各インターンの4段階評価の点数を図1に示した。「評価カテゴリー」の下位概念の「評価項目(概要)」がある項目に関しては、評価カテゴリーごとの把握を目的とし「評価項目(概要)」の平均を出し提示した。分析では各「評価項目(概要)」の詳細にも着目した。「評価カテゴリー」名は一部短縮して表示した。全般的にアジア圏も西欧圏も異なる要因でエンパワメントしている。「3. アクセス」の「3) 担当教員へのアクセス」では一人以外、全員が4点を付けており、留学生活における教員との関係性の重要性が分かる。「4. リーダーシップ」「5. 決定権」「6. 留学生インターンの連携」では西欧圏の学生のほうがアジア圏の学生よりも評価点が高いが、自己を謙遜して評価する態度を示す重要性の認識の差とも解釈できる。「11. 自己効力感」では、西欧圏の学生もアジア圏に劣らない評価であるが、自身の言語能力やアイデアを生かし力を発揮した場合、エンパワメントが可能ともいえる。日本語が得意でない西欧圏の学生がアジア圏と比較して目立たなく見える傾向にあるが、様々な要因によりエンパワメントする可能性に着目しインタビュー分析を行った。

5.2.2 インターンへのインタビューの分析

各学生のインタビュー内容を各「評価項目(概要)」ごとに整理し、要約をつけた表をアジア圏(中国・韓国)4人と西欧圏(オーストラリア・ポーランド・ドイツ)3人について作成し、その一部を抜粋し提示した(表3)。表2に提示した「アジア圏」と「西欧圏」の学生の各「評価項目」ごとの要点も参照しつつ、インタビューの言葉そのものを重要視して分析を行った。以下に各「評価項目」の考察結果を示した。

表2 実習によるエンパワーメント評価指標

評価カテゴリー	評価項目(概要)	アジア(4人)中国・韓国	西欧圏(3人)オーストラリア・ポーランド・ドイツ
		インタビュー 要点	インタビュー 要点
1. 日本語	日本の実社会での日本語の使用	ただの外国人ではない大きな存在 / 日本語を至るところで使用したことによる日本語能力の向上 / 難しい内容も文脈から創造する能力の習得	日本語の理解力向上
2. 日本文化	日本文化・社会の知識の活用	日本文化との距離が小さいことによる自信 / 外部の人との関わりによる日本的マナーの能力向上 / 知識を活用し伝えたことによる達成感 / 厳しい現場で知識活用を体験する意義	日本の社会人の仕事への真剣な態度 / 日本社会で期待される行動様式の理解
3. アクセス	1) 地域社会へのアクセス	集団で適応する自信 / 地域関係者と挨拶のみでなく社交で話せるように成長 / 社会人との対話による経営方法や日本の社会問題についての実感 / 大学外との関わりによる学び	地域の人とつながり / 自分に興味を持つ地域の人との出会い
	2) 市役所へのアクセス	市役所の人との関わりによる自身の日本での存在の意義 / 地域と対等の立場で仕事をすることによる絆	
	3) 担当教員へのアクセス	考えを深めアイデアをもらう機会 / インターンシップで教員から近くで指導を受ける授業を体験したことによる、話し合いの仕方や態度を習得する重要性の認識 / 教員の人間関係構築方法からの学び / 担当教員との近接した関わりと厳しい指導による学び	教員へのアクセスの容易さと自身の参画の重要視
4. リーダーシップ	1) インターンシップでのリーダーシップ	他の学生の観察によるリーダーシップについての考察 / リーダーシップをとる難しさの理解	
	2) インターンシップでの役割の担当	実習による現実の厳しさの認識による将来の再考 / 教員の指導による役割の重要性の学び	勇気を出して挑戦する価値
5. 決定権	1) 仕事における決定権	先生の指導に基づき皆で決定	直感で斬新な仕事を提供
	2) 地域の人々・市役所・学校・企業との協同企画での仕事の提案		デザイン能力の発揮 / 地域貢献の仕事をする機会
6. 留学生インターンの連携	1) 他のインターンとの協力によるプロジェクト遂行	個性を發揮しつつ皆と協力	チームでの能力の発揮 / 他のインターンとの良好な関係
	2) 多国籍の留学生インターンとの協力によるプロジェクト遂行	アジア的な文化的価値観を前提とした西欧圏の留学生の参加 / アジアと欧米とで個性を生かしつつ支援し合う価値	英語堪能なヨーロッパ留学生の観察による自己の日本語での目標 / 他の学生の文化に関する知識習得
7. 留学生の能力に関する認識	1) 外国人でありながらも日本語能力が高いことの実感	自分より日本語能力の高い人の観察による刺激 / 専門的なガイドの仕事に向けた仲間の熱心さと能力の發揮	日本語学習の機会の増加 / 日本人と話すきっかけ
	2) 外国人でありながらも日本的行動を理解していることの実感	日本的行動が理解できているとの自信 / 一部理解できたことへの認識 / 日本的礼儀の学び	日本留学によってのみ学べるヒエラルキーの現実
	3) 日本社会で英語を使用して仕事に貢献できることの実感	パティへの英語による支援	英語のニュースレター作成による力の発揮 / 英語使用の容易さ
8. 文化的な従属的地位の転換	1) 日本で仕事ができる能力の証明による外国人の地位の向上	学生の身分による寛容な評価 / 日本語で専門知識をガイドで伝えたことによる自信 / 地域の人々との交流	興味をもってもらう支援となる仕事への従事
	2) 日本における国際的な仕事への従事	日本と国際の両方を考える場	
9. 日本の地域社会・市役所・学校・企業等への貢献	日本の地域社会・市役所・学校・企業等とのプロジェクトでの留学生の知識の貢献	他のインターンの役割を自分でシミュレーション / 留学生と地域と相互支援の関係	現場で顧客の能力に合わせて内容を転換 / 留学生の知識活用の可能性
10. 他の留学生へのモデル提示	留学生でも日本語で仕事が行っているモデル提示		何か貢献できる可能性の模索 / 新しいことに挑戦する意欲
11. 自己効力感	自己効力感	方法とこつを習得しやる気があればできるとの実感 / 仕事をした達成感・満足感	日本語能力が高くなるとも日本で役に立つ何かができることの実感

出典：筆者作成

1. 日本語

アジア圏の学生は、日本人に地域の歴史的資産を紹介する体験により「日本について話すことについて見る目が変わった」と述べ日本語能力習得の域を超えて新しい視野から日本を見る体験と

なっている。「自分はただの外国人ではなく、もっと存在のある人になれた気がした」からは、意義ある仕事への従事が存在感を高めていることがわかる。西欧圏の学生はアジア圏の学生が上下関係を意識して敬語を使い分ける現場を観察し敬語を学んだと述べた。

2. 日本文化

「特に外部の人と関わることについて授業で学んだ。電子メールとか電話とか学んだ。」、「日本的なマナーとか、何十倍も能力が上がっていると実感している」、「知識が活用できたと感じる」、「実際に応用して身に付けたと思う。本だけでは応用する時はできない」は、日本の実社会での体験学習による価値ある学びによるエンパワーメントである。

3. アクセス 1) 地域社会へのアクセス

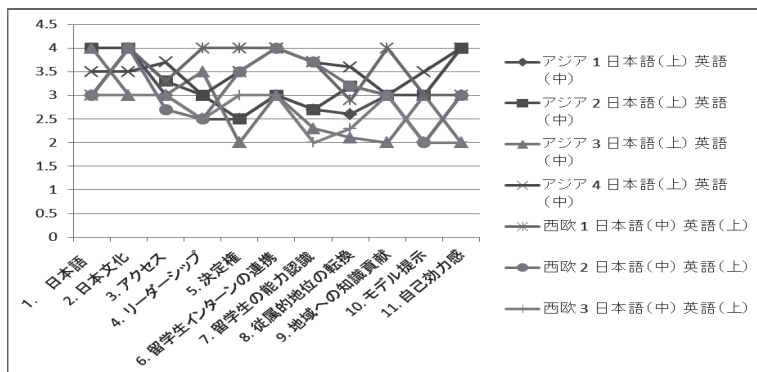
「半年前の自分とは違う。自分がどうやって表現すればいいか分からなくて、ありがとうございます、と言ってばかり。今回はもっと言えた。」は地域の人への対応力をつけたことへの実感である。西欧圏の学生の場合、「自分に興味を持つ地域住民と接触した」ことや、「地域とつながりを築けた」ことにエンパワーメントしたと述べた。

アクセス 2) 市役所へのアクセス

「以前は、市役所のイメージとしては偉い。自分からは距離がある。今は、つきあい。特に、自分は先生の学生として、そんなに低くない地位にあるような気がする。」「相手がもし、とても上だったら、よく扱われなかったら気持ちよくない。平等でなかったら、好きでない。」「この経験を通して、もっと日本が好き。つきあって、人がとても優しく、本当の仕事もできる。」、からは、地域の人々と話し合いつつ実現に向けて行動していく過程で地域に何らかの貢献ができたことを実感し、エンパワーメントを感じていることが分かる。

アクセス 3) 担当教員へのアクセス

「インターンシップは、自分が考えたことを言える」、「先生は上にいるのに、自分の話を聞いてくれるのを感じられる。」「普通は、社会で体を痛めて学ぶものだと思うが、今回は大学で学べていいと思う」、「インターンシップがなかったら先生（指導の先生）がいないっていうかいない感じがする。」では、実習における指導が学生と担当教員との距離を縮めるとともに自身の存在感の意



出典：筆者作成

図1 各インターンによる各「評価カテゴリー」の評価点

表3 エンパワメントに関する留学生インターン（アジア圏）へのインタビュー内容（一部抜粋）

		留学生インターンの特徴	
		出身地域	アジア(4人) 中国・韓国
		日本語能力	上級
		英語能力	中級(簡単な会話は可能)
		専攻	日本語・文化人類学・情報テクノロジー
評価カテゴリー	評価項目(概要)	インタビュー内容(一部抜粋)	インタビュー要点
1. 日本語	日本の実社会での日本語の使用	日本の実社会での使用につきましては、日本語のガイド、日本について話すことについて見る目が変わった。地元の人が、日本語がうまいねって言ってくれた時から、変わってきた。もっと大きくなった気がした。自分はただの外国人ではなく、もっと存在のある人になれた気がした。/ 日本社会という環境にいて、至るところで使った。/ 10月、初めて会議を呉市としたとき、分からないことが多かった。課長さんの話は分かった。今ならもっと分かると思う。	ただの外国人ではない大きな存在/ 日本語を至るところで使用したことによる日本語能力の向上/ 難しい内容も文脈から創造する能力の習得
2. 日本文化	日本文化・社会の知識の活用	特に外部の人と関わることについて、授業で学んだ。電子メールとか、電話とか学んだ。中国と全然違う。日本的なマナーとか、何十倍も能力が上がっている、と実感している。/ 知識が活用できた、と感じる。インターンシップで得た知識で話し合う時に、どう話し合うべきか、初めての挨拶でどう話すべき。造船歴史館の時、いろいろな船についての知識を手に入れて、それを活用して、お客様に説明して、大きな成功した感じがする。最後にお客様に褒められて本当に嬉しかった。/ 実際に、人と話し合っただけで会議したり、話し合ったり、実際に応用して身に付けたと思う。本だけでは応用する時はできない。/ もともとこの授業は遊びのためではない。自分の能力を高めて本当に日本のことを知りたい人の授業。ちょっと厳しいですが、日本社会は厳しいので、それを身につけないとダメ、大変なことをして、自分の能力が高くなると思う。	日本文化との距離が小さいことによる自信 / 外部の人との関わりによる日本的マナーの能力向上/ 知識を活用し伝えたことによる達成感 / 厳しい現場で知識活用を体験する意義
3. アクセス	1) 地域社会へのアクセスができた	今回は倉橋しか経験がなかった。まだ、そういう知識と深く関わった経験がなかった。すぐ、集団に入る自信、適応する自信。/ 半年前の自分とは違う。自分がどうやって表現すればいいかわからなくて、ありがとうございます、と言ってばかり。今回はもっと言えた。/ Y会長と話し合う時、いろんな知識を勉強した。造船歴史館の経営の仕方、この前の合宿のご飯を食べた時、先生達は、今の倉橋の人口の状況について(話し)勉強になった。前には接触できないもの。日本社会について、もっと深い理解ができた。以前は、少子化、高齢化、前は全然実感できなかった。言われたら、実感がわいた。/ 私たちの学生にとってはとてもいいチャンスだと思う。普通は学生は大学の中の人と。外の地域の人とか企業とか、つきあいは必要だと思います。これから社会に入るとは思いますから、とても勉強になると思います。	集団で適応する自信 / 地域関係者と挨拶のみでなく社交で話せるように成長 / 社会人との対話による経営方法や日本の社会問題についての実感 / 大学外との関わりによる学び

出典： 筆者作成

義の再確認となっている。Chanら(2015, 14-15)は、学校教育で異文化接触に対応するカリキュラム構築の複雑性に関する論考において、多文化の背景を持つ生徒と教員の関係性を構築する複雑性とその重要性を論じているが、外国人留学生が日本の地域社会と接する実習で留学生の日本文化理解の困難を理解し支援する指導者の役割は不可欠である。西欧圏の学生の場合、西欧圏での留学経験を持つ担当教員へのアクセスが容易であり、教員が西欧圏の学生の「存在の重要性を常に明示し」、多文化を背景に持つ留学生が協働する意義を示したことが動機づけにつながっている。

4. リーダーシップ 1) インターンシップでのリーダーシップ

アジア圏の学生は「ステージの上で皆をどうアレンジするとか、リーダーのKさんを見ると、何をしている、と、どうやって仕事できる、とか見ていた。」「今なら仕事 cameたら、スケジュールとか、役割分担とか、仕事リストとか、どうすべきかというのは、もっと理解できる。」には、観察により自身のリーダーシップスタイルを模索したり、企画の全行程を体験し、企画を実行する総括的な力をつけたと評価するなど、実行力についてのエンパワメントが表れている。

リーダーシップ 2) インターンシップでの役割の担当

アジア圏の学生が「自分の将来を考えるきっかけとなった」、「今の自分はまだ未熟です」は、企画実行の厳しさを体験し将来のキャリアを現実的に再考する姿である。「100%よくできたとは思わないが、効果が出た。結果が出た」は、ガイドを聞く相手に対し実践を行ったことによるエンパワーメントである。

5. 決定権 1) 仕事における決定権

「一人で決める、のはおかしい。皆で決める。ガイドの形とか、役割分担とか、デザインとか。スケジュールとか。」は、皆で協力し、全行程において皆で決定し、地域で成果を出したことへの評価である。

決定権 2) 地域の人々・市役所・学校・企業との協同企画での仕事の提案

西欧圏の学生の一人がデザイン能力を発揮し地域を紹介するニュースレターを自らの意思で作成した。「皆にびっくりされた」のように、ユニークな感性について行政職員や担当教員から賞賛されたことによりエンパワーメントしている。

6. 留学生インターンの連携 1) 他のインターンとの協力によるプロジェクト遂行

「現場で予行演習。実物を見て、改善したりした」、「担当する部分を英語に直した」、「ガイド、仕事リスト、とか、何回も改定したり」は、全行程において各自の役割を果たしつつ、協力し成し遂げたことによるエンパワーメントである。「一人でできる仕事はないと思う。個性を発揮して、自分のできる範囲で仕事。」からは、各自が持つ個性を出し合い様々な力を発揮し留学生間で協力して生み出すパワーを感じていることが分かる。

留学生インターンの連携 2) 多国籍の留学生インターンとの協力によるプロジェクト遂行

「欧米人は自由形。デザインとか、ガイドも簡単でおもしろい。絵とか、描いたり、マスコットを作ったり」というアジア圏の学生のコメントからは、欧米の学生が自由で気楽な形で特性を生かし能力を発揮する姿への評価が伺える。「私たちが英語の勉強。」、「欧米系入れた方がいい」は、異なる価値観を持つ学生との協働学習を新鮮な挑戦として認識していることが分かる。Colvin & Volet (2014, 80) は、異文化間のインタラクションにおいて、感情が多様性の経験を個人的成長へとつなげる鍵であると説く。また、Kim (2015, 6-7) は、異文化間のアイデンティティ形成の過程での自他との関係性における個性化 (Kim, 1988, 2001, 2005) に言及しつつ、異文化との接触により、民族や文化などの社会的な慣習の中で構成された人員として他者を定義するよりも個別の個人として定義する態度が形成される (Billig, 1987; Hansel, 1993; Oddou&Mendenhall, 1984) ことを論じている。西欧圏の学生による「ともに努力した仲間として真の友情を感じた。形式でない。」からは、成功に向け共に努力し時間を共有した体験が生む感情が、異文化の背景を持つ仲間を一人の人間として見る変容をもたらしていることが分かる。

7. 留学生の能力に関する認識 1) 外国人でありながらも日本語能力が高いことの実感

専門的な地域の歴史や外交について調査し、造船歴史館内を撮影したビデオを見ながら日本語で暗唱して練習する仲間の姿に感動したとの意見があった。実習第1日目の現場でガイド内容を確認したり、英語ガイドの翻訳の支援をするなど協力して準備したことや議事録作成など、本格的に仕

事に挑戦したことがエンパワメントをもたらしている。西欧圏の学生は地域の日本人と話す場ができ、日本語能力の向上をもたらしたことにエンパワメントしたと述べた。

留学生の能力に関する認識 2) 外国人でありながらも日本的行動を理解していることの実感

西欧圏の学生が、上下関係の実際の状況は、「日本で生活しなければ学べない」と述べ、日本社会において人の行動を観察し学ぶ現場を持たたことにエンパワメントしている。

留学生の能力に関する認識 3) 日本社会で英語を使用して仕事に貢献できることの実感

アジア圏の学生は日本語中級の西欧圏の学生への英語による支援が英語を勉強する場となったこと、西欧圏の学生は、地域を紹介するニュースレターを英語で作成し支援を提供できたことでエンパワメントしている。

8. 留学生の能力に関する認識 1) 日本で仕事ができる能力の証明による外国人の地位の向上

アジア圏の学生が、造船歴史館での日本語によるガイドについて「お客様の反応も違った」、「しっかり聞いていた。」のに対し、英語のガイドについては「遊びの気持ちを持って聞いた」と比較観察しているが、地域史に関する知識を真剣に調査し日本語でガイドしたことについて自信を持っている。「地域の人も褒めてくれたりとか」、「ボランティアガイドの人も話してくれて。距離感がなくなった」からは、能力を発揮した貢献により地域との絆ができたことが分かる。

留学生の能力に関する認識 2) 日本における国際的な仕事への従事

アジア圏の学生で、「自分の使った言語は日本語で国際的雰囲気が出ていない」のように、多国籍の人と共に英語などで仕事をするを「国際」と捉え、日本語で日本人を対象に活動することを国際的とは認識しない学生がいた。西欧圏の学生は、少しではあるが地域を支援し人々が自分に興味を持ち、外国への興味を喚起できたことにエンパワメントしたと述べた。自身が日本に国際的交流の場をもたらし、海外と関わることに影響する可能性をもたらしたことに意義づけをしている。

9. 日本の地域社会・市役所・学校・企業等への貢献

「自分の授業のためだけではなくって、倉橋の宣伝とか、力を入れて」には、自身の学びのみではなく、地域に貢献できたことに意欲を感じていることが表れている。倉橋フェスティバル会場での活動に関しては、「ガイドは歴史館についてのみでフェスティバルでもっとできる」と述べ、地域の人々が集まる場で何か新しい視野から留学生が力を発揮できることを体験から認識している。

10. 他の留学生へのモデル提示

西欧圏の学生のコメントで「何もできないということはない。何かすることはあるはず」、「モデルとは思わないが、交換留学生の中にインターンシップに挑戦しようとした学生が少ないことにびっくりした。私は何かをしたい」には、自ら主体的に挑戦しようと考えれば何か力を発揮することが可能、という前向きな態度が表れている。

11. 自己効力感

アジア圏の学生の「やろうとしたらできる、と感じた。どうやってすればいいのか、こつとかみえた。」、「自分の人間的な成長。日本社会で自分が通じることがどうかについて自信」、「達成感、満足感」には企画を成し遂げたことによる達成感が表れている。「日本語は得意でないが、日本で何かできると感じた。日本で何か役立つ仕事ができる」、「ガイドを実行できた。もし恐れて挑戦しな

かったら後悔する。何も失うものはない」と述べた西欧圏の学生からは、勇気を持った挑戦により挑戦すれば日本で何かできるとの実感を持ったことが伺える。

6. 結語

地方に残る歴史的資産を日本の外交史や歴史とも関連させつつ、交換留学生が国際観光ガイドとして日本の地域社会で伝える実習は、地域行政や地域の人々と関わりつつ大学での学術知を実践知として生かす難易度の高い社会体験となった。大学外の日本の地域社会にある慣習を観察し、その環境において日本社会の知識を活かして自身が主体として行動する体験は、留学生に様々なエンパワーメントをもたらしている。高度な日本語能力を生かした専門的知識の伝達、社会人との対人関係構築のスキルや行動様式を理解、地域との対等なパワー関係の構築、多国籍のチームの協力による企画実現など、力を発揮し実行したことがエンパワーメントをもたらしている。日本語が中級でも勇気を出し実習に挑戦した留学生には、日本語上級の学生の観察や地域社会の人々と関わり日本社会の行動様式を肌で感じる学びの場ともなるとともに、自身の得意なスキルを生かす日本社会との新しい関わり方を体験により発見したことがエンパワーメントをもたらしている。Angelique (2001, 46-47) は、変容の学びとエンパワーメントは自身の体験を社会的や政治的な文脈の中におき自分自身のものとするにより起こることや、集団の中での体験が社会的かつ政治的学びをより促進すると論じているが、本実習は地域社会と接する体験を通じ、留学生が大学での学びを社会的かつ文化的な文脈におき意味を捉え直す体験となっている。

日本の地域社会で留学生が持つ文化的背景や特性を活かし主体性を持って活躍する教育現場を創る意義について整理しておきたい。Cummins (2001, 653) は、社会における力関係とマイノリティの生徒の学習とを関連づけた協働的エンパワーメントに関する議論において、教育者は自身の実践と学生とのインタラクションにより自身のアイデンティティを定義するものであり、生徒のアイデンティティを決定するプロセスが教師と生徒の関係性の外の力によってすべてをコントロールされることはないと主張する。つまり、社会の構造の中で規定されている生徒のマイノリティのアイデンティティは変容的な性質を持つものであり、それに対し、教育者は個人的かつ共同体としてエンパワーメントの文脈を創造する潜在的能力を持ち、生徒と教員は不平等な社会構造に挑戦する力を影響力のある形で創り出せると述べる。本実習は、地域社会の文脈で社会的にマイノリティの存在である留学生が、自身の文化を資源として日本文化の理解を最大限に生かしつつ、留学生としての力を地域との協働の関係において発揮し自己効力感を感じる教育的空間を構築したものである。本研究は、異文化と日本文化が交錯する空間において、留学生が留学生間の異文化性にも触れつつ、日本の地域文化を肌で感じる現場での社会体験を様々な視点から捉えエンパワーメントする姿を提示したものである。

【注】

- 1) 広島大学短期交換留学プログラム (Hiroshima University Study Abroad Program) を「HUSA プログラム」と称する。
- 2) 国土交通省観光庁ホームページにある「観光立国推進基本法 (条文)」参照。
- 3) 呉市役所倉橋支所提供の呉市「年齢別人口統計」(住民基本台帳) (平成27年3月末現在) 参照。
- 4) 2015年2月末, 不慮の事故で1名が死亡したためインタビューは7名のみ行う結果となった。

【参考文献】

- 久保美紀 (2000) 「エンパワーメント」加茂陽編『ソーシャルワーク理論を学ぶ人のために』世界思想社, 107-135頁。
- 呉市「年齢別人口統計」(住民基本台帳) (平成27年3月末現在) 呉市役所倉橋支所提供。
- 国土交通省観光庁「観光立国推進基本法 (条文)」(<http://www.mlit.go.jp/kankocho/kankorikkoku/kihonhou.html>) <2015年6月4日アクセス>。
- 総務省「地域における多文化共生推進プランについて (平成18年3月)」(http://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b6.pdf) <2015年5月9日アクセス>。
- 中河和子・鎌田倫子・飯野令子 (2013) 「エンパワメント評価実践においてエンパワメント文脈はどのように高められたか: 当事者意識に着目して」『富山大学杉谷キャンパス一般教育』第41号, 89-106頁。
- 源由里子 (2003) 『エンパワメント評価の特徴と適用の可能性—Fettermanによる「エンパワメント評価」の理論を中心に—』『日本評価研究』第3巻第2号, 70-86頁。
- 宮崎幸江・河北祐子 (2012) 『地域の資源としてのボランティア日本語教室—多文化型「居場所づくり尺度」の観点から—』『城短期大学紀要』第32号, 51-65頁。
- 宮脇秀貴 (2008) 「内発的動機づけとエンパワメント—自律性の支援の連鎖が生み出す組織の活性化—」『香川大学経済論叢』第80巻, 第4号, 57-110頁。
- Alpert, F., Heaney, J., Kuhn, K.L. (2009). Internships in marketing: Goals, structures and assessment – Student, company and academic perspectives. *Australasian Marketing Journal*, 17, 36-45.
- Angelique, H. L. (2001). Linking the academy to the community through internships: A model of service learning, student empowerment, and transformative education. *Sociological Practice: A Journal of Clinical and Applied Sociology*, 3 (1), 37-53.
- Chan, E., Flanagan, A., Hermann, R., & Barnes, N. (2015). Tentative steps into the space of another: Teacher challenges of crossing cultures to build bridges with students. *Curriculum and Teacher Dialogue*, 17(1&2), 11-25.
- Colvin, C., Volet, S. (2014). Scrutinising local students' accounts of positive intercultural interactions: A multidimensional analysis. *International Journal of Intercultural Relations*, 42, 77-92.

- Feldman, D.C., & Bolino, M.C. (2000). Skill utilization of overseas interns: Antecedents and consequences. *Journal of International Management*, 6, 29-47.
- Feldman, D. C. & Weitz, B.A.(1990). Summer interns: Factors contributing to positive developmental experiences. *Journal of Vocational Behavior*, 37, 267-284.
- Kasim, A. & Al-Gahuri, H. A. (2015). Overcoming challenges in qualitative inquiry within a conservative society. *Tourism Management*, 50, 124-129.
- Kim, Y. Y. (2015) Finding a “home” beyond culture: The emergence of intercultural personhood in the globalizing world. *International Journal of Intercultural Relations*, 46, 3-12.
- Vandevier, R. & Menefee, M. L. (2006). Study abroad, international internship and experiential learning: A world-class adventure in learning. *Proceedings of Southwest Decision Sciences Institute* (Oklahoma City,OK) 200-207.

Assessing the Empowerment of International Exchange Students: the Globalization Support Internship

Naomi TSUNEMATSU*

This paper concerns the assessment of the empowerment of international exchange students who worked as ‘International Tourism Guide’ in a local ship building museum while enrolled in the course entitled ‘the Globalization Support Internship’. International exchange students from Asia, Oceania, and Europe introduced the development of ship building technology and industry in the local town and its relation to the history of trade and diplomacy of Japan in Japanese and English. As international tourism guides cooperating with local city officials and local power actors, international student interns have had new opportunities for empowerment by being connected to local people in an equal power relationship. For international student interns, their knowledge about Japan and their international perspective was a key for taking initiative in their project which could contribute to the promotion of international tourism in unique ways.

The international tourism guide internship provided international students with a unique learning opportunity to work closely with local government officials and experience local culture. It also created opportunities for promoting cross-cultural understanding and the development of multi-culturalism in the local society. The international student interns were empowered by various factors such as utilizing their knowledge of Japanese language and society; contributing knowledge from international perspectives, and contributing their unique skills. Mutual acquisition of cultural knowledge and also knowledge on the Japanese language usage by working in a multi-cultural team was also empowering. Interns expressed that their international experiential learning has brought a sense of self-efficacy in their relationship with local administration and people. Through the practicum the interns have also developed insight into the application of their knowledge to their future careers which are related to Japan in new ways.

* Associate Professor, International Center, Hiroshima University